案内絵ハガキから見た貴重書展示会のイメージ（20）

「鎖国期をはさんだポルトガル人の日本研究 ～日本ポルトガル修好通商条約150周年記念稀覯書展示会～」

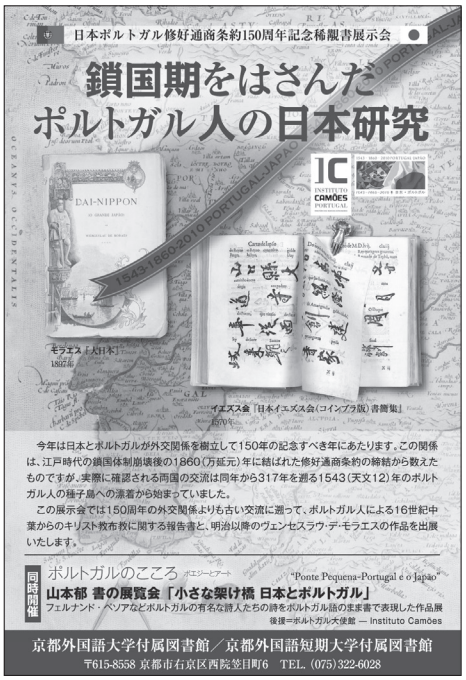
荒木　加菜子

ご存じの方が多いとは思いますが、京都外国語大学付属図書館の特徴的な活動の一つに貴重書展示会があり、1968年からほぼ毎年ユニークなテーマに沿って開催されています。この貴重書展示会の案内絵ハガキコレクションは、図書館一階の検索カウンター近くに飾られていますので是非ご覧になってください。

今回私は、2010年に開催された展示会の、「鎖国期をはさんだポルトガル人の日本研究」について紹介したいと思います。この展示会は、日本ポルトガル修好通商条約150周年を記念して開催されました。

一般に、1543年が種子島に漂着したポルトガル人と日本人が初めて出会った年とされており、その初めての出会いから今年で471年になります。鉄砲伝来をはじめとして、その後の南蛮貿易や宣教師たちによるキリスト教布教活動を通じ、ヨーロッパの文化や製品が流入したため、日本では様々な分野でポルトガルの影響が感じられます。言語の分野では、ポルトガル語起源の日本語の単語は少なくとも約40あり、例としてカッパ、パン、ボタン、コップ、タバコ、ジョウロ、コンペイトウ、ビロード等が挙げられます。また、日本に印刷機械を導入したのもポルトガル人で1591年に日本で初めて印刷がなされ、『イソップ物語』などの西洋文学も紹介されています。このように、日本にとってポルトガルは社会や文化、そして言語にまで影響を与え、深い交流を持った国とされています。

私が四年間、ブラジルポルトガル語学科の生徒として教科書や参考書で学んできたポルトガルの偉大な日本研究者モラエスの作品、また、日本とポルトガル両国の長い歴史の中でポルトガル人たちが著してきた書物など、非常に魅力的な本が本学図書館にはあります。



ここでは少ししか紹介することが出来ませんでしたが、この「鎖国期をはさんだポルトガル人の日本研究」展示会、また、今までに開催された展示会の様子や資料は本学のホームページから見ることが出来ますので、是非ご覧になってください。きっと、素晴らしい書物に出会うことが出来ると思います。

あらき　かなこ（ブラジルポルトガル語学科4年次生）